

初代 桂南天



本名・竹中重春。明治二十二年三月二十三日、大阪市東区（現中央区）竜造寺町に生まれる。父は俄師の大和家小宝楽で、芦の家十郎とのコンビで有名な林田二郎や、横山エンタツの相方であった杉浦工ノスケ、浮世亭歌楽も、この小宝楽の元門人。花菱アチャコが一座に在籍していた時期もある。

父親の影響で幼少時から芸事になじみ、六歳の時から俄や落語を舞台で演じた。十四歳の時に二代目桂南光入門、桂重光を名のる。明治四十年三月、師匠の桂南光が桂仁左衛門改名披露の席で桂仁助と名を改める。その後、桂春堂、月亭明遊、栃面家喜多八等の名前を名のり、新桂派時代には、再び仁助に戻り、その後反対派に移ってからは、桂南天と名を改めている。泉水亭家鴨と名のついていた時期もあったらしい。改名は多かった。その後、反対派は、吉本花月派となったが、昭和二年に吉本興行部を辞める際には（拜啓、桂南天儀、永々浪花落語を吉本興行部に出演致し居り候処、此度、不都合の点有之候故、昭和三年二月二十日限り首と相成り、当日より浪人致し居り候間、今後は御信用御取り上げなきよう、本人より御注意までに御一報申上候 敬具 桂南天拝）とする粋な文面の挨拶状を関係各方面へ配っている。以後は、フリーとなる。

昭和十一年四月、上方落語衰亡に危機感を募らせた五代目笑福亭松鶴が、自宅を楽語荘と名付け、同

人を募集、翌年からは各地で「上方はなしを聴く会」を開催したが、その活動に南天も参加している。戦時中は、北九州に疎開して、地元の座に入って活動。戦後は、再び、五代目笑福亭松鶴らの「上方はなしを聴く会」等の落語会へも出演している。

『逆さまの葬礼』『関の津富』『植木屋娘』『せんち壺』『のぞき医者』『天狗さし』『口合小町』等の落語を手がける一方、「諸芸十八般」と称して、紙切り、記憶術、錦影絵、指影絵、滑稽手品、踊り等古き佳き時代の寄席情緒を伝えた。

昭和三十九年二月二十三日、堺市浜寺の羽衣荘で「桂南天 高座生活七十周年祝賀会」を開催。南天を中心に二代目旭堂南陵、三代目帰天齋正一、橋ノ円都、林家トミ、千葉琴月が舞台に居並び、背後には「創業明治二十七年南天興業歌舞色界者 芸能展示会会場」と大書きされていた。

下駄箱をたたいて過ごす七十年 南天
かわりあいましてかわらぬ七十年 南天
——との句も披露。

昭和四十七年九月二十二日、没。享年八十三。南天は名刺の肩書には「ふるい頭」と印刷し、飄々とした風貌で欲得のない、なによりも芸を見せるのが好きだった。公私ともに縁が深かった桂米朝に最後に残した言葉は「おもしろう暮らしたわ……」というもの。風流人であった。法名は「遊光院釈南天」。

その米朝が施主になった三七日法要兼告別式（昭和四十七年十月十日、玉出光福寺）には芸界内外の多くの人々が集まった。

南天はかつて米朝に「師匠の、桂南光」という名跡をもう一度、世に出したい」と話していた。それが機縁となって新桂南天の師匠の桂南光の襲名につながったのであろう。その南光も手がけた米朝一門

に伝わる錦影絵の道具は桂南天旧蔵のものである。

桂南天の音声記録としては、「日本の放浪芸 小沢昭一が訪ねた道の芸・街の芸（ビクター）」所収の錦影絵口上や、「桂米朝 上方落語大全集 特典」（東芝）の落語「口合あんま」、「上方落語寄席離子集」（コロムビア）のレコード、「大阪の売り声」（昭和三十九年六月二十六日収録）の録音等がある。また、映像としては、読売テレビ「YTVサロン」（昭和四十六年十二月九日収録）での寄席のおどり「ずぼら」が残る。インタビュー記事としては、『百年の大阪 4 商都の繁栄』（大阪読売新聞社編、昭和四十二年十一月九日、浪速社）所収「明治風物記 その三 錦影絵 ―動くワイド幻灯―」がある。

●参考文献

桂米朝「南天翁半生記」（桂米朝集成「第四巻」師・友門人）（岩波書店）所収。
桂米朝「上方落語ノート」（全四集、青蛙房）。
橋本礼一「桂南天」（豊田善敬・編「はなしの焦点」No.63（第三巻）所収）。
戸田 学（作家）



南天紋



結び柏